

Eureka XI

六年制通信 No.25 令和5年11月10日(金)号

不要不急

しつこいと思われるかもしれませんが、私はいまだにコロナ禍において散々耳にした「不要不急」という言葉が頭から離れません。不要は必要のないこと、不急は急ぐ必要のないこと。つまり「今やらなくてもいいこと」です。だとしたら、それらはなるべくしなくてください、というのがコロナ禍で言われていたことでした。では、その逆の「必要かつ急がなくてはならないこと」とは何かを考えてみたことがあるのでしょうか。必要かつ緊急のことだけを行う、あるいは、それらだけしか行わない生活とはどのようなものなのでしょう。考えてみると私たちの生活、一日24時間ある生活の、その営みのほとんどは「今でなくても別にいい」ことではないのでしょうか。

少し英語で考えてみましょう。その方がピンとくるかもしれないので。「不要不急」を訳してみると恐らく unnecessary か non-essential ではないかと思います。やはりこちらの方がわかりやすいですね。「必要な」は皆さんよく知っている necessary ですから「不必要な」は unnecessary、essential は「不可欠な」という意味ですから、「別になくてもいい」と言いたいなら non-essential でいいでしょう。もう少し詳しく言えば essential は Water is essential to life. (生命には水は絶対に必要だ) などの例文に使えますから「それがないと死んでしまう」という強い意味があります。ですから unnecessary は「必要ない」ですが non-essential は「それがなくても、それをしなくても今すぐ死なない」と言えそうです。そして考えてみると、世の中は non-essential なものばかりですよ。それをしないと今すぐ死んでしまう」ことを二つ三つすぐ思いつきますか。私は思いつきません。本を読む、別に今でなくても。コーヒーを飲む、別に今でなくても。テレビを観る、別に今でなくても。勉強する、別に今でなくても、何なら明日も明後日もしなくていいならしたくないというか。極端なことを言えば、ご飯を食べる、別に一食くらい抜いても、となりますよね。こう考えてみると、私たちの日常は non-essential な活動で成り立っていると言ってもいいのではないのでしょうか。コロナ禍はむしろそのことを私たちに教えてくれた、そんな気がします。ただじつと、生命を維持する最小限の活動だけをして日常を過ごす、人はそんな生活に満足できないのですね。私たちには「日常の彩り」とでも言うべきもの、一言で言えば文化でしょうか、文化的な活動が必要なのですね。心豊かに生きていくためには。なくても死にはしないが、なくては生きていけないもの、その代表が文学だと私は思います。

コロナ禍が開けるころ、百貨店の「西武・そごう」が出したメッセージを最近知りまして、感動したので紹介しますね。心のこもったいい文章ですよ。

なくてもいいと言われるものと、

私の心は生きていく。

キラキラ胸が躍ったり、フラフラと浮き立ったり。

そんな、気持ちが満たされる時間が不要不急と呼ばれ、

必要最小限の生活に取り組んだ2年間。

去年、百貨店が通常営業できたのは数日でしたが、それでもまた、

一人ひとりが人生を思い切り楽しめる日常がやって来ると信じてきました。

今年がどんな年になるのかはわかりません。けれど、

美しいものや、ときめくことを、見たり触れたりできる一年にするために、

私たちはお客さまをお出迎えいたします。

人が前に進むには、心にも栄養が必要だから。

いかがですか。「お出迎えさせていただきます」ではなく「お出迎えいたします」と、きちんとした日本語がまた気持ちいいですね。私たちは一見無駄に見えるものに支えられて生きている。そのことを昔、恩師の一人が岩波書店の『図書』（2011年9月号）に書かれました。人が必要とする土地についてのエッセーです。トルストイの掌編を引用しつつ、最も古い例として『荘子』（雑篇「外物篇」第二十六）を示しておられます。私も度々これを引用してきました。要約すると「大地は広大だが人が利用するのは足を置くわずかな土地にすぎない。しかし足の寸法以外の土地をすべて削ってしまっ、果たして人は安心して立つことができるか。やはり足を置く以外の広大な大地が人には必要なのだ」、この広大な大地を不要不急と切り捨ててはいけませんね。

今週のおすすめ

・道尾秀介 『ソロモンの犬』（文春文庫）

「ソロモンの指輪」については、世間ではどの程度知られているのでしょうか。皆さんは耳にしたことがありますか。ちょっとマニアックな知識かもしれませんね。

個性的な大学生四人のグループが主人公。大学の椎崎鏡子助教授の一人息子が飼犬オービーと散歩中に事故で亡くなってしま。オービーが急に走り出したため、トラックに轢かれてしまったのだ。一部始終を見ていた秋内は、これは事故死ではなく他の三名の中にオービーをわざと走らせた犯人がいるのではないかと疑う。それで同じ大学の動物学者間宮助教授に相談に行く。

と、まあミステリー小説のように書きましたが、読んだ感想としては、これはむしろ青春小説と言った方がしっくりきます。動物行動学的に、メスは好きなオスの前では声が高くなる、間宮からそう聞いた秋内は好きな羽住智佳の声のトーンに一喜一憂する。青春小説やん。しかも、やっぱり、どう考えても男はバカであることがわかる小説ですな。この本では、間宮先生のキャラが一番鮮明に立っていて、しかも好感の持てるオジサンとして描かれています。会ってみたいくなりますよ、きっと。この人を主人公にミステリーでも何でも書いてくれないかなあ、というのが私の正直な感想です。

BGMは アンドレ・ギャニオン の めぐり逢い でした…。